

アフリカにおける女性の国際労働移動

児玉由佳

本研究は、サブサハラ・アフリカの女性の国際労働移動の実態を明らかにすることを目的とする。女性の国際労働移動については近年関心が高まっているが、アフリカに関する先行研究は日本ではほとんど蓄積されていない。本研究では、アフリカの女性の国際労働移動が、どのような要因によって規定されているのかを解明することを目指す。

●研究の背景

植民地化以前から、アフリカの人々は民族大移動や牧畜民の遊牧活動、大陸の東西を結ぶ通商、宗教的な巡礼などによって活発に移動していた。植民地時代には、自由な移動が制限される一方で、「都市化」された地域への経済移動や、鉱山地域などへの強制移住、それに付随したインフォーマルな労働移動などが行われていた。また、1960年代以降に多くのサブサハラ・アフリカ諸国は独立を獲得したが、1980年代以降に進められた構造調整政策などによる経済状況の悪化によって、経済機会を求めて国境を越える労働移動者が顕著に増加するようになったのである。

●アフリカの国際労働移動の特徴

現在、サブサハラ・アフリカ諸国において国際労働移動は活発化しているが、その特徴の一つが「移民の女性化」である。「移民の女性化」は世界的な傾向であるが、サブサハラ・アフリカで女性の国際労働移動について言及されるようになったのは、他地域よりも遅い1980年代以降である。1980年代以降の経済状況悪化によって男性だけでなく女性も経済的理由で国外へ移住するようになった。その結果、女性の国際労働移動がもたらす社会的、経済的影響も拡大することとなった。

アフリカの女性の国際労働移動についての事例研究は徐々に蓄積されてきているが、国際労働移動のパターンは大きく3つに分類することができる。

一つは、アフリカ域内での女性の労働移動である。

アフリカでの国際労働移動は、アフリカ域内の移動の方がアフリカ域外よりもはるかに多い。女性についても、長距離の移動が社会規範的にも資金的にも困難であるために、周辺諸国への移動が多いのである。

第2に、アフリカ域外（主に中東や旧宗主国）への非熟練労働者、特に家事労働者としての女性の労働移動である。より良い経済機会を求めて、女性のアフリカ域外への移住は増加しつつある。アフリカ女性は、先行している東アジアからの家事労働者よりもさらに安価な労働力として雇用される一方で、虐待や劣悪な労働条件などの人権侵害の問題にも直面している。

第3に、熟練労働者の労働移動による頭脳流出の問題である。女性に限らないが、医師や看護師のような国内でも必要とされる人材が、高収入を得るために先進国へと移住するケースが報告されている。

●研究会のめざすもの

このような分類から分かるのは、アフリカの女性の労働移動の多様性と階層性の存在である。地域によってそのパターンは異なっており、この違いは各地域で構築されているジェンダー関係に規定されていると考えられる。

ただし、今のところ多くの研究がデータの提示や現状報告にとどまっており、サブサハラ・アフリカの国々の経済・社会構造や歴史的な経緯を分析枠組みに含めた研究は端緒についたばかりである。アフリカ域内の多様性を考慮に入れたアフリカ横断的な比較分析もなされてこなかった。本研究では、これらの点に留意しつつアフリカ女性の国際労働移動の多様性を解明することで、女性たちが抱えている構造的制約を理解すると同時に、構造的制約のなかで女性の主体性がどのように発揮されたのかについても検討する。

（こだま ゆか／アジア経済研究所 アフリカ研究グループ）